

「筑後川まると博物館」

筑後川まると博物館運営委員会 館長 駄田井 正

「筑後川まると博物館」の歩み (設立から現在まで)

●前史／筑後川は九州一の大河と言われ、流域には150以上の川に関する団体があります。これら団体の取り組みと交流を背景として、20年の歴史をもつ「筑後川フェスティバル」や、10数年前からの「水環境交流セミナー」、久留米大学による流域研究プロジェクト等が実施されてきました。こうした成果を合流させて、NPO法人筑後川流域連携倶楽部が設立されました。●1999年／NPO法人筑後川流域連携倶楽部の設立に伴い、その主要事業としてエコミュージアム「筑後川まると博物館」が構想され、流域グループと関係者による検討が続けられてました。さらに現地調査や流域住民へのアンケート、シンポジウム、講演会等が重ねられ、50数グループをネットワークした「筑後川まると博物館」の全体像が出来上がりました。●2001年／パンフレットやホームページが完成し、関係者への説明会開催を経て6月、「筑後川まると博物館」が正式に発足。9月、久留米大学で「筑後川流域講座」を開講、独自の学芸員養成システムもスタートしました。●2002年／3月、第1期の学芸員22名が誕生。7月、第5回全国「川の日

ワークショップ」でグランプリを受賞しました。

●2003年／学芸員を中心とする筑後川まると博物館運営委員会が設立されました。以後、「筑後川なんでも発見団」等多様な分野に活動を拡充しています。●2006年／3月、第1～第5期認定学芸員が計43名となり、編集を担当する「筑後川新聞」が平成17年度の「全国地域づくり誌コンテスト」で優秀賞を受賞しました。同年5月には、「日本水大賞」の厚生労働大臣賞を受賞。

公開講座「筑後川流域経済論」の開講 と学芸員養成システム

●久留米大学での公開講座と現地学習

「筑後川まると博物館」では久留米大学の協力で「筑後川流域経済論」を年間を通して開講しています。この講座は、公開講座ですので久留米大学生だけでなく、一般市民の方々も自由に受講でき、毎回200名前後の学生と約20名の一般市民が受講しています。

前期は、4月～7月の毎週1回、後期は9月～12月の同じく週1回開講していて、毎回流域各地から多彩な講師をゲストに招いて実施しています。また、期間中は実際に現地を見学して地元で活動してい



写真：久留米大学での公開講座



写真：現地学習

る方の説明を受ける「現地学習」を上、中、下流と3回、前後期で計6回実施しています。毎回、40名以上の学生、市民が参加し、現地体験の感動を共有しています。

●独自の学芸員養成システム

「筑後川まるごと博物館」では、独自の学芸員養成システムがあります。この学芸員は、「筑後川の案内人、解説者」のことで、「まるごと博物館」の運営委員会メンバーとして、様々な活動を実際に担っていく人のことです。学芸員には、希望すれば学生、一般市民を問わず誰でも応募できます。応募資格は、「筑後川流域経済論」を6回以上受講し、「現地学習」に1回以上参加した人です。学芸員の認定希望者には、期末に課題レポートを提出していただき、担当者（「筑後川まるごと博物館」館長、副館長、事務局長）の面談によって認定します。現在までに、5期43名が学芸員として認定され「筑後川まるごと博物館」の様々な活動と運営に活躍しています。

●「筑後川流域リバーパーク」構想への対応

筑後川まるごと博物館運営委員会は、NPO法人

筑後川流域連携倶楽部と協働して流域再生の柱としようとする「筑後川リバーパーク」構想をすすめています。これは、筑後川流域の豊かな自然、食、祭り、文化等を生かした「遊び／観光」を中心として流域経済を活性化させようと構想されました。筑後川流域を各々の特色を生かした12のゾーンに分けて各地の風土を楽しんでもらうシステムで、既に6つのゾーンで体験モデル旅行を実施し、学芸員も案内スタッフとして参加しています。また、いままでに「筑後川まるごと博物館」のホームページを見て訪れたアメリカ、韓国、中国からのツアー客も計5回ありました。今後も学芸員による「リバーパーク部会」を中心にこの構想を担う事務局として対応をさらに充実させていきます。

体験型学習「筑後川なんでも発見団」と「ちくご川キッズ探検隊」

●「筑後川なんでも発見団」の活動

私達の地域は筑後川に多くの恵みをもたらされています。しかし多くの人々は現在筑後川に余り関心がなく川は汚れ環境は悪化しています。そこで、一般市民の川への関心を高めることを目的として2004年度より活動を始めました。筑後川発見館く



写真：筑後川を背に学芸員集合



写真：筑後川大水害写真展・証言大会

「筑後川まるごと博物館」

筑後川まるごと博物館運営委員会 館長 駄田井 正



写真：ちくご川キッズ探検隊

るめウスを拠点に自然、環境、生活、文化、歴史など筑後川流域を学び知る体験イベント、気楽な講座、わかりやすい展示など高齢者から子供まで世代を超えて親しめる活動を行っています。来場者延べ5,000人以上の実績を持つ「昭和28年筑後川大水害写真展」では、毎年体験者の方々がその体験を発表する場ともなり、名物展となっています。またその他にも流域で活躍した人物の物語や、流域の自然や生活を映像と共に紹介する講座、流域の歴史を掘り下げる講座などが人気を集めています。

●「ちくご川キッズ探検隊」の活動

小中学生ならだれでも楽しみながら参加できる「こどもエコクラブ」として2005年より活動を始めました。「筑後川発見館くるめウス」を基地として、子供たちが筑後川流域の自然や生き物に親しみ、私達のまわりの環境などを知り、考える活動を年間通して行っています。夏休みには「こ～ら川こども探検隊」として川に入り遊びながら水質や生き物などの体験学習、あるいは高良山での探鳥会や自然観察会、また「くるめウス」での実験や体験を伴う環境学習など子供達が楽しんで学べ

る場を創っています。これらの活動は、流域で活動している個人、グループ、団体の方々と協力し合いながら実施しています。

筑後川流域の連携と再生への取り組み、流域内外への情報発信

●流域グループとの交流／「筑後川宣言」への対応

筑後川まるごと博物館運営委員会は、その基盤である流域グループとの連携交流にも積極的に取り組んでいます。「筑後川フェスティバル」や「水の森」植林活動等多くのグループとの協同作業はもとより、個々のグループの催しにも参加、交流して連携を深めています（上流「リバーフェスタ三隈川／川の楽校」や中流「耳納塾、水の文化リレー／来て見てん山苞の道／水色自転車の社会実験」、下流「川辺りの会、アシ焼き／大川の酒蔵コンサート、肥後街道を歩く／柳川水の会、掘割清掃」など）。さらに独自企画として前述した「昭和28年筑後川大水害写真展」を流域で巡回展示し、体験者の語りや、シンポジウムを実施し多くの流域住民やグループとの交流を行っています。また、催し面だけではなく流域の河川環境向上の為に「豊か清らか筑後川宣言／コンセンサス会議」へ流



写真：流域団体との交流イベント（Eボート）

Chikugoriver-museum

九
その流況の森、高根
市
流況の人々
*111



1 筑後川流域に存在する旧郡(別荘・生頼)、文化、歴史、屋敷等、それぞれがもつとちの
面、を軸心に保存、活用し、観光資源と、環境・自然・文化・歴史・産業・生活・教育・

- こうした状況の中、別荘川流域に豊かな自然資源を有し、地域の活性化に貢献する観光資源として、別荘川流域の観光資源の活用が図られていく。

京極川まるごと特別推進委員会

- 利生、48名の万内病者川あふること増悪の便員

「戦後川まるごと博物館」では、久田を入学制に

「筑後川から西へ、豊前県」の運動

一般市民が川への関心を高めることを目的

「ちくご川キッズ探検隊」の活動

ハ中絶生ならだれでも楽しみながら参加できる
ブ」)として2005年より活動開始。(筑波、1998)



2001年10月、光畑の格闘技に関する記事を刊行。『映画』「たかこと時野野村」では、主演・高橋良二を「11」の人物や事件の解説として取り上げ、上

「だが人気を失っている。」

●「ムーン」は、FOTOに、角田の同僚記者が、
その子犬に抱きかかっています。

る。兩壁に忠實なスズの生育に適した河豚の山菜の土壌と出る
煙が行われていたことが、江戸後期、本枝術の導入によるスズ

下流城

ト原料は、武田、佐賀両半島のブリーク産であり、新門田に湧き出た水を杉の葉に引込めて利用するという、アコ（淡水、泉水）に充ちられていた。ブリーク産には、上と下からの差とを共に受け入れる性質であり、アコは再び地に落ち、右半島の塩田が、右半島を流す水になった。既述のように山と海とが力を合せてあり、また二つを合流して海に注ぎこんだ。

下天城、自羽藩三郎の

に用いている。

[illegible]

っている。

河合川武雄と文
雄が1971年7月



中
流
域

江戸時代、大坂の商賈が主たる甲州産に集って「義経に集」に
すが、この型が「野」で育った札幌の工芸であった。この目録に
歌舞と能二種と一類のりかえしがあり、未だかつての義経たちの汗
と血の跡がのびた。歌舞は「あはれ」の本は、水戸藩を襲った後
に作り出された本で、それ以来、歌舞は歌舞の道を、更に豊か
に作り出されたのだった。

長川-2塔、明倫水車所と
一帯に広がる田舎の風景

魚の目



「**基礎**」は、ヒアリングを軸と
する安全な学びづくり

ンタ リズムが定まるまで継続して
てゐる。



上
流
域

筑前州の上流は小国・杵築を中心とする山に文化圏、スギの世界である。雨量に恵まれスギの生育に適する豊かな土壌と山と出で乾気が行われていたことが、江戸後期に本技師の導入によるスギの拡大につながった。下流大田の村は地形により大田・田原・このはスギの専売地帯で干ばつに耐性があり、スギの栽培はほぼ自給し、道場でも育て上げた水原林であった。

八重連山
四国八重連山の雄姿



海外に、いかに環境づくりに
グリーンソーシズ、日本でも

図2-9-10 山形県内各地の人口密度（人口1000人あたり）



「筑後川まると博物館」のパンフレット
流域の上中下流の特色と、関係する約50の活動団体・グループを紹介している。

「筑後川まるごと博物館」

筑後川まるごと博物館運営委員会 館長 駄田井 正

域40数グループと共に、「筑後川まるごと博物館」として参加し、民間主導による筑後川流域の汚染防止を目的とした広域条例制定に向けて、共同討議と実現のため様々な取り組みを行っています。

●流域情報誌「筑後川新聞」の編集担当とホームページの充実及び「住民がつくる筑後川まるごとインターネット博物館」社会実験の実施

流域内外に、隔月で15,000部発行している「筑後川新聞」(8ページフルカラー)の企画から取材、編集を主として当館の学芸員が中心となって行っています。2006年3月には「全国地域づくり誌コンテスト」で優秀賞を受賞しています。また、新たに作成したホームページ(<http://ccrn.jp/>および<http://blog.ccrn.jp/>)も学芸員からの情報を基にして最新の情報を載せるように努めています。さらに、平成17年度は「筑後川まるごと博物館」をベースにしたインターネット博物館の社会実験に

も取り組みました。上流の小鹿田焼、中流朝倉の三連水車、下流は大川昇開橋と柳川のさげもん祭りの4ヶ所で、地元の方に解説していただき流域内外と東京を結んでのライブ中継を行いました。そしてこの折の情報は、映像データとしてホームページ上でいつでも見られるシステムとなっています。



写真：筑後川新聞